

スポーツショップ

中3男子 加賀真也

中3男子 猪野悟

店員 小山幸宏

店長 佐々木智彦

津田夏海の父 津田大輔

津田夏海の母 津田朋子

スポーツショップ。

近隣の学校指定のジャージの販売も行うようなスポーツショップ。1階は野球用具を主に取り扱いつつ、卓球、バドミントン、テニスなどの用品も扱っている。2階は主にスポーツウェア、学校ジャージ、上履きなどを扱っている。

2階レジ内には小山がいる。中3男子二名はパーテーションで区切られた奥で在庫の整理をしている。

店長の佐々木に連れられて、津田夫婦が2階に上がってくる。

佐々木 「小山くん七中のショーパン。あと上履き」

小山 「はい」

佐々木 「お願いね（パーテーションの奥の中学生のところへ行く）」

小山 「サイズはおいくつですか？」

津田朋子 「22.5」

小山 「22.5ですね。ジャージの方のサイズは」

津田朋子 「Sでいいよね」

津田大輔 「Mじゃなくていいのか」

津田朋子 「Mの方がいいかな。大きめの方がいいですかね？」

小山 「そうですね。だいたい皆さん今よりワンサイズは大きめのを買っていく方が多いですね」

小山 「ネームの刺繍の方は」

津田朋子 「お願いします。津田で」

小山 「こちらにご記入お願いできますか」

津田朋子 「はい」

パーテーションの奥

佐々木 「おはよう」

中3男子二人 「おはようございます」

佐々木 「今はなにしてるの？」

加賀 「あ。・・・サイズ別に分けて、数えています」

佐々木 「そうか。うん」

佐々木 「元気よくな」

加賀 「はい」

猪野 「はい」

加賀 「あ、もう終わりました」

佐々木 「そうか。小山くん終わったって」

小山 「はい。じゃあそれ持ってきて」

佐々木 「持ってきてって」

男子二人 「はい」

男子二名が在庫をそれぞれ持ってパーテーション奥から店内に出る

小山 「じゃあ、それあっちの棚に出しちゃって」

小山 「一番右の棚の下から2番目のところ。わかる？」

男子二人 「はい」

中学生男子が目にとまる津田夫婦。津田夫婦の前を通り在庫を運ぶ男子二人

加賀 「・・・こんにちわ」

猪野 「こんにちわ」

津田大輔 「・・・」

津田朋子 「あれ。真也くん」

津田夫婦しばらく作業する中3男子を不思議そうに見つめる

津田大輔 「あ」

津田大輔 「ああ。職場体験か」

小山 「あ。そうなんです。職場体験実習で。今来てるんです」

津田大輔 「なんだ。そっか。びっくりした。なんでいるんだらうって」

津田朋子 「そっか実習か」

小山 「ではこちら、4800円になります」

津田朋子 「はい」

小山 「ありがとうございました」

津田朋子 「じゃあ真也くん頑張ってね」

加賀 「はい」

佐々木 「ありがとうございました。ほら」

加賀 「ありがとうございました」

猪野 「ありがとうございました」

津田夫婦、階段を降りていく

佐々木 「小山くん、彼らに何か次の仕事ふってあげて」

小山 「わかりました」

佐々木は階段を降りていく

小山 「よし。じゃあ。どうしようかな」

加賀 「・・・」

猪野 「・・・」

小山 「あ。じゃあ。ウェアのサイズ表とかポップを棚につけてもらおうかな」

男子二人 「・・・はい」

小山 「じゃあ、これ。このサイズ表を左の棚の上に貼ってくれるかな」

男子二人 「はい」

小山 「届くかな」

男子二人 「はい」

小山 「本当にいけるか？」

サイズ表を持って手を伸ばすが、二人の身長では届かない高さであるとわかる。

小山 「うん。じゃあ。届かない場合は、あっちに脚立があるから、それを使って貼るといいよ」

男子二人 「・・・はい」

小山 「ひとり足は脚立を押さえてあげる係な」

脚立を取りにいくふたり。見守る小山。どちらが脚立に乗るか少し戸惑うが、加賀が脚立に上り、猪野が押さえる係になる。

小山 「うん。気をつけてな」

小山 「もう少し右かな。うん。そう商品のコーナーの真ん中あたりに」

小山 「そう」

小山 「じゃあ新しいポップも貼ってってもらえるかな。ここにあるやつ。商品名と照らし合わせてな。貼って行って」

男子二人 「はい」

小山 「よろしくな」

男子二人 「・・・はい」

小山は階段を降りていく。しばらく作業している男子二名。

猪野 「さっきの」

猪野 「・・・さっきのって」

加賀 「ん」

猪野 「さっき七中のジャージ買って行ってたの。4組の津田夏海の親？」

加賀 「そうだよ」

猪野 「加賀って津田の親知ってんの」

猪野 「さっき挨拶してたじゃん」

加賀 「親が仲良いだけだよ。保育園と小学校が一緒だったから」

猪野 「津田って兄弟いんの？」

加賀 「何が」

猪野 「さっき、1年のジャージ買ってたから」

加賀 「ああ。2歳下の妹がいる」

猪野 「へえ」

猪野 「加賀、知ってる？」

加賀 「・・・何が」

猪野 「津田夏海ってさ」

猪野 「こないだ教育実習で来た藤岡ってやつとできてるらしいぜ」

加賀 「なにそれ」

猪野 「見たらしいぜ。下田たちが。津田夏海が藤岡の車の助手席に乗ってるって」

猪野 「やったのかな」

猪野 「やってるよな」

加賀 「知らねえよ」

猪野 「大学生だろ。藤岡って」

猪野 「やばいよな。中3とだぜ」

猪野 「バレたら絶対やばいよな」

加賀 「喋んなよ。実習中だろ」

猪野 「でも絶対やってるよな」

加賀 「うるせえよ」

猪野 「なにお前」

猪野 「好きなの？ 津田夏海のこと」

加賀 「そんなんじゃねえよ」

加賀 「実習中にくだらないうるなよって言うてんだよ」

猪野 「かわいいもんな。津田夏海」

加賀 「違うって言うてるだろ」

猪野 「人気あんもんな。他のクラスでも津田狙ってるやつけっこういるもんな」

加賀 「知らねえよ」

猪野 「でも絶対もうやってるぜ。藤岡と」

加賀 「黙れよお前」

猪野 「いいよな」

加賀 「・・・」

猪野 「津田、胸でかいもんな」

加賀 「うるせえよ」

猪野 「ずるいよな。大学生が」

猪野 「加賀。俺立ってきたよ」

加賀 「やめろよ」

加賀 「実習中だぞ」

猪野 「仕方ないだろ」

猪野 「加賀ってさ。好きな女子で想像しない奴か」

加賀 「そんなんじゃないって言うてるだろ」

猪野 「じゃあするだろ」

加賀 「しねえよ」

猪野 「しないのか」

猪野 「俺はするよ」

加賀 「知らねえよ」

猪野 「でも俺はそういうことで差別しないから」

加賀 「何だよ差別って」

猪野 「好きな女子をおかずにしないとか。そういうことはしない」

加賀 「・・・。」

猪野 「俺は、とにかくクラスの女子全員とそういう想像はしたから」

猪野 「回数に差こそあっても。ちゃんと全員とする想像してるから」

猪野 「そういう主義だから」

猪野 「卒業までには学年の女子全員でしようと思っている」

加賀 「そんなことを俺に言うなよ」

猪野 「お前は好きな女子ではしないっていう主義なんだろうけど。俺はそういう差別はしない主義だから」

加賀 「お前もう喋るなよ」

猪野 「俺がそうしようと思ったのはさ。罪悪感だよ。自慰行為の後ってのは妙な罪悪感が残るだろ」

猪野 「俺は考えたんだ。この罪悪感は何なんだろうって。もしかしたら、俺の勝手な選り好みでそうしたことが問題なんじゃないかと思ったんだ」

猪野 「だから俺は選んだりしない。満遍なく出席番号順にしていくことにしたんだ」

加賀 「もういいよ」

加賀 「黙れよ」

猪野 「加賀。お前は間違ってるぞ」

加賀 「なにがだよ」

猪野 「好きな女子ではしないけど、する女子もいるんだろ」

猪野 「その差はなんだよ。むしろ失礼だろ」

加賀 「してねえよ」

猪野 「してないわけないだろ」

加賀 「お前と一緒にするなよ」

猪野 「するなら差別せずにちゃんと全員をそういう目で見ろよ」

加賀 「黙れって言ってんだよ」

加賀が猪野に殴りかかる。お互い腕を掴み引っ張り合う。回る。もみくちゃになりながら床に転がる。そこに小山が戻ってくる。

小山 「なにしてる」

小山に引き剥がされる二人

小山 「なにしてたんだ」

小山 「職場体験中だぞ」

小山 「なんでだ」

小山 「どうしてこんなことになった」

小山 「加賀くん。どうしたんだ」

小山 「猪野くん。なにがあった」

小山 「黙ってちゃわかんないぞ」

男子二人 「すみませんでした・・・」

小山 「今日のことは学校には報告しないから」

小山 「言ってみろ」

男子二人 「・・・・・・・・」

小山 「わかるよ」

小山 「君達もいろいろとストレスもあるだろう」

小山 「俺も君達くらいの頃はたくさん悩むこともあった。・・・ただでさえ今は。複雑だと思う」

小山 「転校してきてずっと戻れないでいる子だっているだろ。そういうストレスがある人もいれば、もともといた子たちの気持ちもわかる」

小山 「一時県外に避難してからこっちの学校に転校してきた子もいるだろう。そういう子がうまく馴染めないでいるっていうのは。そういう話は聞いている」

小山 「家で親が言ってることにも自然と影響を受けたりするもんだ」

小山 「でも君達は君達だ」

小山 「申し訳ない。全部大人の都合なんだよな」

小山 「君達が悪いんじゃない。そんなことで君達が傷つけあうのはとても悲しいことだし。心が痛い」

小山 「俺は。想像力の問題だと思う」

小山 「もっと想像してみよう。お互いで。相手の立場になって。想像してみよう。そうするだけでもっと世界は素晴らしいものになる」

小山 「イメージで曲知ってるか」

小山 「ジョン・レノンっていう人の曲だ。俺も君達くらいの頃に初めて聞いた」

小山 「想像してごらん。想像するだけで世界は変わる。変えられるんだ」

小山 「聞いてみるか」

小山、ポケットからスマートフォンとイヤホンを取り出し、イヤホンを片っぼずつ二人につけさせる。

「ありがとうございます」と言う男子。曲を再生させる。それを聴く二人。

小山 「英語の曲だ」

小山 「想像してごらん 天国なんてないんだ」

小山 「やってみれば 簡単なこと」

小山 「地面の下に地獄なんてないし 僕たちの上にはただ空があるだけ」

小山 「さあ、想像してごらん みんながただ今を生きてるってことを」

二人ともただ聞いている。

終わり